変わり続ける教会　　**使徒 6:1～7**

使徒の働き 6 章まではペンテコステの日に、聖霊が降って誕生した教会が、主イエス・キリストの福音を大胆に宣べ伝え、いろいろな妨害や迫害に遭っても、かえってそれによって確信を深められて伝道をしていったこと、その教会に多くの人々が加わっていき、またたく間に成長していったこと、そして教会は周囲の人々から尊敬を受け、好意を持たれていたということが語られていました。ところが 6 章に入ると、教会の中にある問題が起ってきたこと、もめ事が生じたことが語られています。教会は、何の問題ももめ事も起らない天国のような所ではありません。エルサレムに生まれた最初のキリスト教会からしてそうでした。しかし使徒の働きにこのことが記されているのは大切なことを教えるためです。その問題に良い対処がなされたので結果的には「こうして、神のことばはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった。」使徒 6:7 となりました。今日はエルサレムの教会に起こったこと、それにどのように対処して問題を解決したのかについて見てゆきたいと思います。

まずこのもめ事は何だったのでしょうか。1 節に「そのころ、弟子の数が増えるにつれて、ギリシア語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情が出た。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給においてなおざりにされていたからである。」とあります。もめ事が起ってきた原因は基本的には、「弟子の数が増えてきた」ことにありました。教会は、最初はほんの一握りの人々の群れでした。しかし彼らが聖霊を受け、伝道を開始してしばらくすると、何千人という人々が群れに加わったのです。せいぜい数十人の群れと、何千人の群れとでは、集団のあり方が根本的に違って来ざるを得ません。ですからこのもめ事は教会の成長に伴って必然的に起ってきたことです。教会は生きて変化し、成長していきます。変化にはある苦痛やストレスが伴います。いやな気分にもなります。しかしそういうもめ事を通して、教会は成長し、また相応しい体制へと整えられていったのです。

このもめ事は、「ギリシア語を話すユダヤ人」と「ヘブル語を話すユダヤ人」との間に起りました。最初の教会には、そういう二つのグループがあったのです。「ギリシア語を話すユダヤ人」とは、当時の地中海世界のあちこちに移り住んでいたユダヤ人が当時の共通語だったギリシア語に慣れ親しみ、それを主に使うようになった、そういう人々です。そういう外国出身のユダヤ人でエルサレムに帰って住んでいた人々がいたのです。それに対して「ヘブル語を話すユダヤ人」の方は、ずっとイスラエルの地に住み続けており、言葉もイスラエルの言葉であるヘブル語を話している、(正確にはヘブル語に近いアラム語だったようですが)そういう人々でした。彼らは自分たちを「生粋のユダヤ人」であると誇り、ギリシア語を話すユダヤ人を軽蔑するきらいがありました。そういう、当時のユダヤ人社会の中にあった対立の構造が、教会にも持ち込まれて来たのです。

そういうことなら教会もこの社会と全く同じかというと、決してそうではありません。社会の影響を受けてしまうことがあるとは言え、教会は外にはない一つの絆によって結ばれています。その絆とは、「信仰」であると言えるでしょう。しかし本日の箇所には、それをもっと具体的に言い表わす言葉が用いられています。それは、「弟子」という言葉です。「そのころ、弟子の数が増えるにつれて」とありますがこの「弟子」とは、主イエスの十二人の弟子、つまり使徒たちのことではありません。教会に加わった信仰者たち全ての者が、「弟子」と呼ばれているのです。そこには一つの大事なメッセージが込められています。教会とは、主イエスの弟子の群れであるということです。私たちを結び合わせている絆は、主イエスの弟子であるという絆なのです。社会では、人間関係にもいろいろな違いがあり、対立関係があったりもします。どうも気が合わない、考え方が違う、生活習慣が違う、あの人とは付き合いづらい、うまく行かない、そう思ったとしても、共に教会に連なり、礼拝を守っていることにおいて、共に主イエス・キリストの弟子として生きているのです。私がどのように感じようと神の目から見るなら皆キリストの弟子なのです。私は時々、教会の人間関係においてストレスを感じる時に私も誰かにストレスを与えながら受け入れてもらっているんだなと思います。お互いいろんな違いがありますがそれぞれは主イエスの弟子として同

労者であるという共通の絆あるいは土台の上に立っているなら、それを乗り越えていく道が開かれるのです。

さて教会で起こっていたもめ事の内容ですが、それは「やもめに対する日々の分配」に関することでした。ギリシア語を話すユダヤ人のやもめたちが、ヘブル語を話すユダヤ人のやもめたちよりも軽んじられている、という苦情が寄せられていたのです。当時の教会においては食べ物だけでなくお金や物の分かち合いが日常的になされていました。それが「日々の分配」です。やもめは、みなしごと並んで、当時の社会において、社会的弱者の代表でした。ですから貧しい人への分かち合いの多くはやもめたちの生活を支えることでした。その分配において、不公平が生じたのです。２節で使徒たちが、「私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。」と言っているように、その分配はそれまでは使徒たちが行なっていました。しかし人数が多くなっていく中で、全体を正確に把握するには手が回らなくなり、不公平が生まれてしまったのです。ここで注目したいのは、このもめ事は、教会において信者たちが互いに支え合い、助け合うために分かち合って生きている、そこで起ったということです。つまり教会におけるもめ事は多くの場合、よい事をしようとしているところに生じるということを覚えておく必要があります。悪意はないのです。二つのグループが何かボタンの掛け違いと言いましょうか少しコミュニケーションにズレが出たのかもしれません。

このようなもめ事が起ってきたことに対して、教会はどのようにそれに対処したのでしょうか。２節以下に、使徒たちが弟子たちを、つまり信者たちをすべて呼び集めて一つの提案をしたことが語られています。その提案とは、食事の世話、つまり日々の分配の業を担う七人の奉仕者を新たに選び出すことでした。一同はこれに賛成し、ステパノを始めとする七人を選び、使徒たちは祈って彼らの上に手を置きました。七人の奉仕者が新たに立てられたのです。彼らはどういう務めを与えられたのでしょうか。それはもめ事が起った「日々の配給」の働きです。その務めを負う新たな奉仕者が立てられたということです。

このことから私たちはいくつかの大事なことを教えられます。私たちは通常、もめ事に対してどのように対処しているでしょうか。特に教会においては、もめ事が起るなら、そういうことはやめる、もめ事の原因となるようなことからは手を引く、といった消極的な対処の仕方をする場合が多いように思います。しかしこの場合は全く逆でした。もめ事の種になるから、日々の配給の働きをやめるのではなくて、もめ事を解決して、そのことがより適切に、きちんとなされていくように、新たな奉仕者が立てられたのです。つまり、今行われている良い働きをさらに拡大、成長させるための積極的な対処がなされたのです。

次に、新たに立てられたこの奉仕の務めの内容を考えていきたいと思います。彼らの奉仕は、信者たちが献げたものを管理し、それを適切に、必要なところに分配する働きでした。ですから、給食係ではありません。捧げられた食料、献金、様々な生活必需品を弱い者、貧しい者、支えや助けを必要としている人を、教会として支え、必要な助けを与えるために配分する働きです。つまり、神様の恵み、主イエス・キリストの救いが、教会に連なる信仰者一人一人に、具体的に及んでいくための重要な働きなのです。それはただ短時間で効率よく食料やお金を頭数で割って分配すれば良いということではありません。私たちが使っている言葉で言えば、牧会、それは羊飼いが群れを養い、導き、世話をする働きを意味しているのです。つまり彼らは、教会において牧会が適切に行われるために立てられたとも言えるのです。

この６章の記事は、教会における執事職の起源として読まれてきました。「毎日の配給」の「配給」（分配）という言葉と、「食卓のことに仕える」の「仕える」という言葉は原文では同じ「ディアコニア」という言葉です。献げものを管理し、必要な所にそれを分配するという働きを負っていった人々が、後に執事と呼ばれるようになったのです。今ならそれは役員ということです。ですからここに教会における執事の務めの本質が示されています。一人一人の奉仕を適切にアレンジして、必要なところに必要な奉仕が行き届くようにするのが執事の務めです。教会員の奉仕を取りまとめ、それを導いて、教会全体として互いに仕え合い、支え合う群れを築いて行くための奉仕を執事はするのです。

さて、起ってきたもめ事に対処するためにこのような新たな奉仕者が立てられたわけですが、使徒たちの提案における最も大事なポイントは何でしょうか？　２節の「私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。」。また、4 節「私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。」この中にヒントがあります。使徒たちは、食事の世話、日々の分配を担当する新たな奉仕者を立てよう、と提案したのですが、それは、そういう奉仕者がいた方が分配がスムーズに行われるとか、もめ事が起らないですむ、ということではありません。使徒たちの視点は、神の言葉がないがしろにされないように、ということであり、祈りと御言葉の奉仕が教会においてしっかりとなされることなのです。
教会には、いろいろな問題やもめ事が起ってきます。それは教会にとって一つの危機です。しかし最も大きな危機は問題に対処する時に、神様のみ言葉がないがしろにされることです。効率の良い方法、誰からも文句が出ない賢明なやり方を思いつくことなど、それは悪いことではないのですがそういうことをしているうちにみ言葉への真剣な思いが失われ、み言葉に聞き従おうという姿勢がなくなってしまうとしたら元も子も無くなってしまうのです。それは、どんなもめ事や対立にも優って、教会にとって致命的な危機となります。何故ならば、主イエス・キリストの十字架の死と復活による罪の赦しの恵みを告げるみ言葉こそ、聖霊によって教会に与えられているいのちだからです。このみ言葉に対する真剣な思いが失われてしまうならば、どんなに活発な活動がなされていても、そこには聖霊によるいのちはありません。神のみ言葉が語られ、それが真剣に聞かれるということにこそ、教会のいのちがあるのです。従って、使徒たちの提案は、新しい奉仕者を立てようということですが、同時にそれは、祈りと御言葉の奉仕をしっかり確立しよう、ということでもあるのです。もめ事、問題の解決は、礼拝においてみ言葉が語られ、それが真剣に聞かれることによってこそ得られるのです。そのために教会を整えることこそ、もめ事への最も有効な対処と言えます。もめごとや問題の分析や解決の提案をすることと解決することの間には大きな差があります。

今年の教会の指針は「みことばに生きる教会」です。みことばによって生きるとは聖霊によって自分自身が変化することです。聖霊によって私たちが変えられ、新しくされるのは、み言葉に聞き従うことにおいてです。み言葉をないがしろにして、ただ周囲の状況に流されて変わっていくのでは意味がありません。それではかえって大切ないのちを失うことになるのです。教会が、新しい状況に応じて自らも変えられて新しくなるとは、その新しい状況の中でみ言葉がよりしっかりと語られ、より真剣に聞かれる時にそうなるのです。そのために、変えるべきことは変え、捨てるべきものは捨て、新しい務めが必要ならそれを立てるのです。このようにも言えるでしょう。私が今以上にみことばを聞くようになるためには奉仕にどのような変化があれば良いのか？本日の箇所で、もめ事に対処するための教会がしたのはそういう自己変革でした。それによって、教会の生命が、つまり主イエスの福音のみ言葉が、より力強く響き渡るようになったのです。

自分自身の中で福音のみことばを響きにくくしているものはありませんか？　物の音も一つ角を曲がったり、壁が厚くなると聞こえにくくなります。私たちにとってそれは自分だけの常識、プライド、物事を斜めに見る偏見、慣れといったものかもしれません。教会が変わるということは信仰者である自分が変わることです。あの人が変わってくれたらということではありません。教会がもめ事を通して新しい職務を立て、自らを新しくしていったことによって、神の言葉がますます広まり、弟子の、つまり信仰者の数も非常に増えていきました。なんと祭司も大勢信仰に入ったと書かれていますがこれはユダヤ人の宗教的権威、指導者である人々にすら、み言葉が広まり、信仰者が起されたということです。福音の風通しがよくなったのです。教会の伝道力がそれだけ強くなったとも言えます。私が変わらない限り、教会も変わることがないのです。願わくは私たち自身が神様に用いていただきやすくなるために変えて下さいと主の前に進み出たいと思います。